

弘舞○和論語に弘舞
宇多源氏也道徳兼才
人也號華嚴院僧正
とあり

(三頁)經文おどの紐ひをむふ結。上下よぞたき釋きよちがへて。二筋筋の中より。わな紐のか頭ら横をよこ横さまよ引出横を事は。つねのとなり。さやうよしたるをば。華嚴院弘舞僧正見惡と直きてなほさせけり。是は此比やうの事なり。いとよくし。うるはしくは。たゞくるくど卷まきて。上より下へわなのさきをさ挿ことさむべし。と申されけり。ふるき人よて。かやうれ事舊あれる人よなん侍ける。

(三頁)人の田を論論ぎるもの。うたへ訟ま負けて。ねた妬さま。その田を取りてとれ。とて人をつか道はしけるよ。まつ道道をがられ田をさへ行かりもて行めくを。これは論論ト玉ふ所道よあら道ぎ。いかよかくは。といひければ。かるものども。其所道とて道もかる道べきま道と

萬葉集○二十卷あり
古今集序に昔平城天
子詔侍臣合撰万葉集
とあり平城の天子は
聖武孝謙時代をいふ
かすみたつ云々○万
葉集に幸讀岐國安益
郡之時軍王見山作歌
霞立つ長き春日の晚
にけるわつきも知ら
ず叢肝の心を痛み子
鳥云々とあり

わり理なければ。ひが事僻せん參とてま參りる物なれば。いづく何處をりから可ざらん。とぞいひける。とわり。いとを可か笑かりけり。

(三頁)よぶ喚こ鳥は春のものなり。とはかりいひて。いかなる鳥確ともさ記だか記よ記あるせるものなり。ある眞言書真言書れ中喚よ喚ぶ

鳥鳴なく時。招魂招魂の法をばおこなふ次第行有り。是は鷓鳩鷓なり。萬葉集の長歌長歌よ。かすみたつながき春日の。などつゞけたり。鳩鳩鳥鳩も喚喚子鳥喚の事と機さまよ通かよひて通ま通こゆ。

(三頁)萬の事はたのむべから恐ぎ。おろかなる人深はふかく物を頼勢む勢ゆる勢よ。うらみい怨かる事怨有り。い勢きはひ有り深とて頼むべから強ぎ。こと強きもの先ま滅つほろぶ。財多先とて頼むべから選ぎ。時選のま選失選ひや選ま選と。才選有り選とて頼むべから選ぎ。孔子選も時選よ選あ

はぎ。徳ありとて頼むべからず。顔回も不幸なりき。君の寵を
 も頼むべからず。誅をうくる事をみやかかなり。奴もたがへり
 とて頼むべからず。そむさとしる事有り。人のこゝろざしを
 も頼むべからず。かならず變ぢ。約をもたのむべからず。信有
 る事すくなし。身をも人をもたのまされは。是なる時はよろ
 こび。非なる時はうらみぢ。左右ひろければさはらぢ。前後と
 はければふさがらぢ。せまき時はひとけくたく。心を用る事
 すこしきよして。まびしきときは。物よさかひあらそひてや
 ぶる。ゆるくしてやそらかなる時は一毛損せぢ。人は天地の
 靈なり。天地はかぎるところなし。人の性なんぞとならん。寛
 大よしてきはまらざる時は。喜怒是よさはらぢして。物のた

めよわづらはぢ。

(三) 三秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとも月
 はかくこそあれ。とて思ひわかざらん人は。無下よ心うかる
 べき事なり。

(三) 三御前の火爐。火を置く時は。火をさして。さむ事なし。
 かはらけよりたぐちようつせべし。されはころびおちぬや
 うよ心得て。すみをつむべきあり。八幡の御幸よ。供奉の人。淨
 衣をきて。手よて炭をさし。れければ。ある有識の人。白き物を
 きたる日は。火をさしを用る。くるしからぢ。と申されけり。

(三) 三想夫戀といふ樂は。女。男をおふるゆゑの名よはあら
 ぢ。もとは相府蓮。もとのかよへるなり。晋の王儉。大臣として。

八幡の御幸に云々淨
 衣をきて○八幡の御
 幸は何時なるか詳な
 らず淨衣は白張裝束
 なり

晋の王儉○字は仲寶
 齊に仕て尙書令とな
 る

廻忽○匈奴なり唐の時に回鶻と改むにては樂の名なり

平宣時○北條宣時大佛陸奥守と號す最明寺入道○執權時頼の法號なり

家蓮よちちををうゑて愛せし時のがくなり。是より大臣を蓮府といふ。廻忽くわいこうも廻鶻なり。廻鶻國とて。えび夷そのこと強も國有り。その夷漢いびまかんは伏して後己来りて。おのれが國の樂がくを奏せしなり。

(三草五平)の宣時朝臣老昔の後。むか語しがたり。最明寺入道。あるよ宵ひの間。よ招さるゝ事有りし。やがてと申ながら。ひた垂れのなくて。とかくせしほど。又つか使ひ来りて。直垂などのさふらはぬ異や。夜なればとやうなりとも。とく。と有りしかは。なえたる直垂。うち内く々のまゝ子よて。まかりたりし。てう子し土よかはらけとりそへてもて出添て。此酒をひと獨りたうべんがさう寂と寂ければ申つるあり。さか肴あこそを肴けれ。人は

まづ寢まをぬらん。さ然まぬべき物何やある。といづくまでも求め玉へ。と有りしかは。紙紙燭燭あそくさ限てくま々をもとめしほど。だい所の棚たなは小がはらけ器。みそれ味を少こ附つきたるを見出足て。是ぞ求得えられさふらふ。と申ししかは。事足たりなん。とて心快よく數獻そくけんし及びて。興入よいられ侍り入き。其世入よはかくこそ侍入しか。と申され入き。

(三草五平)最明寺入道鶴岡しやまのの社社參まのついで許。足利左馬入道あしかげのものとへ。まづつか使ひをつか遣はして。立入いられたりける要に。あるとまうけられたりける應やう。一獻けんようちあは鬯び。二獻けんよえび。三獻けんにかいもち接い待よてやみぬ。その座接よは亭主夫婦りゆうじん。隆辨りゆうべん僧正そうじ。あるトかたの人接よて座待せられけり。さて年毎どに給毎はる足利

の染物。心もとなく候。と申されければ。用意しさふらふ。とて
色々の染物卅。前よて女房どもに。小袖よてうせさせて。後よ
つかはされけり。其時見たる人の。ちかくまで侍しがかたり
侍しなり。

(三草七)ある大福長者のいそく。人は萬ぞさしおきて。ひたふる
に徳をつくべきなり。まづこくてはいけるかひなり。とめる
のみを人どす。徳をつかんと思はゞ。まづりらくまづ其心づ
かひを志ゆぎやうまべし。其心といふは他のとにあらざ。人
間常住の思ひよ住して。かりよも無常を觀ぜる事なかれ。是
第一の用心なり。つぎに萬事れ用をかなふべからざ。人の世
に有る自他よつけて。所願無量なり。欲よ志たがつてこゝろ

ざしをどげんと思はゞ。百萬の錢有りといふとも。志はらく
も住まべからざ。所願はやむ時なり。財はつくる期有り。かぎ
りある財をもちて。かぎりなき願よしたがつ事得べからざ。
所願心よまさを事あらば。我をほろほまべき惡念きたれり。
とかたかつしみおそれて。小用よもなすべからざ。次よ錢
を奴のぞくしてつかひ用る物とらば。ながく貧苦をまぬ
かるべからざ。君のぞく神のぞくおそれたうとみて。したがつ
へ用る事なかれ。次よ耻よのぞむといふとも。いかりうらむ
る事なりれ。次よ正直よして約せりたぐすべし。此義をまも
りて。利をもとめん人は。富のきたる事。火のかわけるよつぎ。
水のくだれるよしたがつたがふがとくなるべし。錢つもりてつぎ

究竟は理即にひとし
○理即、名字即、親行
即、相似即、分真即、究
竟即、これを六即といふ
理即は一色一香

ざる時は。宴飲聲色を^事とせせ。居所をかざらざ。所願をなさ
ゞれども。心とことなへ^安。やすくたのし。と申さ。抑人は所願
を成^成せんが爲^財。たからをもとむ。錢をたからとする事は願
を^協ふるがゆゑなり。所願あれどもかなへざ。錢あれども
用るざらんは。まつたく貧者と^同おあ^樂。何をかたのしびとせ
ん。此おきては。たゞ人間の望みをた^絶ちて。貧をうれふべから
ざと聞えたり。欲をあ^成してたのしびとせんよりい。あか^不財
あからん^不い。癰疽をやむ者。水にあ^洗ひてたのしびとせん
よりい。やまざらん^不い。あか^不。あ^不にいたりては。貧富わ^分
所^等あ^等。究竟は理即^似ひとし。大欲は無欲に^似たり。
(三三六)狐は人よくひつくものなり。堀川殿にて。舍人^寝がねたる

中道に非ざるなきな
ごをいひ究竟即は智
斷圓滿なるをいふ
堀河殿C久我の一門
太政大臣基具堀河と
號す

足を。狐にくはる。仁和寺にて。よる本寺^通れ前をとほる下法師
よ。狐三^飛とびか^懸、ぞてくひ付けければ。刀をぬき^抜て是をふせ^拒
間。狐二^突正をつく。ひとつはつきころ^突ぬ。二はよ^避けぬ。法師は
あまた所^喰くはれながら。そゆゑあかりけり。

四條黃門○四條中納
言其名を詳にせず
龍秋○樂人豐原龍秋
なり
荒涼○過言或は失禮
なごいふ義なり

(三三九)四條黃門命せられてい^日とく。龍秋は道^至よりてはやん
どあさ者あり。先日來りてい^短とく。短慮のいた^極り。さはめて荒
涼の事あれども。横笛の五の穴は。いさ^少、かいぶか^不らき所の
侍るか。とひ^私をか^私に是を存^隔ぎ。其ゆゑは干^干れ穴は平調。五の穴
は下無調なり。其間に勝絶調をへ^隔だてたり。上の穴雙調。つさ
に亮鐘調を置^置て。夕の穴黃鐘調なり。其次^亮鏡調をおきて。
中^中れ穴盤陟調。中と六とのあはひ^神仙調有り。かやうに間

千の穴○二目の穴な
り
夕の穴○五目の穴な
り

のく〇口をのくるなり即ち吹録に口を持直す意なり

景茂〇大神氏にてこれも樂人なり

性骨〇天性の義なり

々にみな一律をぬきめるに。五の穴のみ上の間、調子をもちたぎして。おかも間をくはる事ひとときゆゑよ。其聲不快なり。されは此穴をふく時はかならざるのく。のけあへぬ時は物よあはぎ。ふきうる人かたし。と申さ。料簡のいたりまよ興有り。先達後生をおそるといふと此事なり。と侍りき。他日、景茂が申侍しは。笙はあらべおふせてもちたれば。たゞふくはかりなり。笛はふきながらいさのうちにてかつらでもてゆくものなれば。穴をよ口傳のうへは性骨をくはへて。心をいゝ事。五の穴のみよかぎらぎ。ひとへよのくとさきりも定むべからぎ。あしくふけは。いづれの穴も心よからぎ。上手はいづれをもふきあはぎ。呂律の物よかなはざるは人の

とがなり。器の失はあらぎ。と申さ。

(三十三)何事も邊土はいやしくかたくななれども。天王寺の舞樂のみ都よとちぎといへは。天王寺れ治人の申侍しは。當寺の樂は。よく圖をいらべあはせて。物のねいめでたくとへのほを侍る事。外よりもきぐれたるゆゑは。太子の御時の圖今よ侍るを。おかせとす。いとゆる六時堂のまへの鐘なり。そのこゑ黄鐘調のものなかなり。寒暑よしたたがひてあがりさがり有べきゆゑよ。二月のねさん會より。聖靈會までの中間を指南とす。秘藏の事なり。此一調子をもちて。いづれのこゑをもとへの侍るなり。と申さ。およそ鐘のこゑは黄鐘調なるべし。は無常れ調子。祇園精舎の無常院のこゑなり。西園寺のか

太子〇聖德太子なり
六時堂〇晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時の行を務むる堂にて天王寺にあり
ればん會、聖靈會〇涅槃會は二月十五日に行ふ釋迦の寂滅日なり聖靈會は二月廿二日に行ふ聖德太子の忌日なり
祇園精舎〇天竺にて釋迦の説法したる寺なり

西園寺○太政大臣藤原公經の家なり

浄金剛院○本名を天安寺といふ嵯峨の権野にあり

建治弘安○後宇多天皇の年號なり

放免○檢非違使廳の雜役を務むるものなり

水干○衣服の名なり歌の心○古歌に蜘蛛の井に荒れたる駒は緊くさも二道かゝる人は頼まじとあり

道志○明法道の輩の衛門志に任して檢非違使廳の公事を奉行するものにて此處は即祭の下奉行するものをいふ

竹谷乘願房○竹谷は醍醐にあり乘願房は浄土宗の名匠なり東二條院○後深草天皇の皇后なり光明眞言寶篋印陀羅尼○共に經文の名にて廣大無邊の利益功德あるものなり

我宗なれば云々○以下乘願房の弟に答へたる詞なり

たづのおほいとの○九條内大臣基家總殿と號す

ね黄鐘調入よいらるべしとて。あまた度敬いかへら更けれども。かな協はざりけるを。遠國尋よりたづね出されけり。浄金剛院の鐘のこゑ。又黄鐘調なり。

(三十三)建治弘安の比は。まつりの日祭れ放免のつけ物精よと様なる紺の布四五端作まで。馬をつくりて。尾髪毛よはとうとみをして。くものるかきたる水干水よつけて。歌の心などいひてわたりしと。つね常よ見及び侍波しなども。興有りて語いたる心ちよてこそ侍りしか。と老たる道志道ごもの。今日もかたり侍るなり。此比はつけ物年を送て過差殊との外重なりて。萬のおもき物を多くつけて。左右の袖を人よ持せて。みづからはほ持こをだよ息もたぎ。い苦まつきくるしむ有さま。いと見ぐるし。

(三十三)竹谷乘願房。東二條院へ参られたりけるよ。亡者亡の追善善よは。何事か勝利多おほき。とたづねさせ玉ひければ。光明眞言寶篋印陀羅尼言と申されたりけるを。弟子どもいかよかくは申玉ひけるぞ。念佛勝よまさる事候さふらふまど。とはなど申玉然ぬぞ。と申ければ。我宗なればさこそ申さまほ然かりつれども。まさしく稱名正を追福追よ修して。巨益巨有るべしとかける經文を見及ばねは。何よみえたるぞとかさねてとせ玉重む。いかゞ申さんと思ひて。本經の慥慥なるよつきて。此眞言陀羅尼問をは申つるなり。とぞ申されける。(三十三)たづのおほいとの大も。童名童たづ君君なり。鶴鶴を飼玉飼ひける故非よ。と申事むひがとなり。

陰陽師有宗○陰陽頭
安倍有宗にて兼好が
許へ尋ね來しなり

多久資○伶人なり
通憲入道○少納言藤
原通憲法名信西諸道
の才人なり
磯禪師○源義經の妾
靜の母なり
水干○衣服の名なり
白拍子○音楽を用ひ
ずして舞ふより起り
たる名なり

佛神の本縁○佛神の
由來縁起なり
源光行○土岐左衛門
尉光行後鳥羽院の北
面の土なり
龜菊○後鳥羽院の寵
を受けたる舞女なり
信濃前司行長○傳記
不詳
七徳の舞○白氏文集
新樂府の首にあり初
め破陣樂舞といひし
を後に七徳舞といふ

山門○叡山にて延暦
寺をいふ
九郎判官蒲冠者○
九郎判官は義經蒲冠
者は範頼なること誰
も知れり

(三十三)陰陽師有宗入道。鎌倉よりのほりて尋まふで來りし
が。まづさし入て此庭のいたづらよひろまて淺ましく。有べ
からぬとなり。道知を植するものも。うゑることをつとむ。ほ細を道一
つ殘のこしてみなはたけ畠作よつくり玉へ。といさめ侍りま。まてよま少
ここの地を徒もいたづらよおかん置とと益けきなきとなり。食物藥
種しゆなどを植るおおくべし。

(三十三)多久資が申けるも。通憲入道まひの手の中よ。興有る
事どもをえらびて。磯いその禪師ぜんじといひける女教よを入へてま舞
せけり。白しろ水干みづかんよさうまさをさへせ。ゑほ鳥帽子う女を引入いた
りけれ男を。を舞とこまひとぞいひける。禪師がむ女め靜づりと
いひける。此藝舞をつ聞けり。是白拍子の根元なり。佛神の本縁を

うたふ。其後源光行おほくの事を作れり。後鳥羽院の御作も
有かめぎくり。龜菊教よを入へさせ玉ひけるとぞ。

(三十三)後鳥羽院の御時。信濃前司行長。稽古けいこのはま警れ有忘りけ
るが。樂府がよの御論義ごろんぎの番ばんよ召おれて。七徳しちとくの舞まひを二つわすれた
ま憂ければ。五徳冠者ごとくくわんじやと異名いみなをつまよ憂けるを。心憂う憂事憂よして。
學問がくもんとて。遁世とんせたりけるを。慈鎮和尚じちんくわう。一藝有るものを
は。下部しもぶまでも召おさして。不便ふびんよせさせ玉ひければ。此信濃入
道みちのを扶持ふち扶持り玉ひけり。此行長入道平家物語しやうけいを作りて。生佛しやうぶつと
いひける教盲目めうもくよ。を教へてかた語らせけり。さて山門さんもんの教を。
とよ殊ゆ殊く殊かけ殊を。九郎判官くわんげんの事事を能く能く能く能て書かの
せたり。蒲冠者かほのくわんじやの事事は能く能く能く能りける能よ。おほくの事と

記 漏
もをいするしもらせり。武士の事弓馬のわざは。生佛東國のも
のよて。武士 問 書
のよて。ぶしよとひ聞てか、せけり。うの生佛が生づきのこ
るを。今の琵琶法師をまなびたるなり。

(三百二十七) 六時禮讚を。法然上人の弟子。安樂といひける僧。經文
を。あつめて作りて。つとめよけり。其後太秦善觀房と云僧。
節 博
ふしそりせを定て聲明よなせり。一念のねんぶつの最初な
り。後嵯峨院の御代よりそとまれり。法事讚も同善觀房始
たるなり。

(三百二十八) 千本のしやり念佛を。文永の比。如輪上人と認められ
けり。

(三百二十九) よき細工を少しよぶき刀をつくりふといふ。妙觀が刀

六時禮讚○晝夜の六時に淨土を禮讚して罪障を消滅する勤行の法式なり
太秦○山城の廣隆寺又太秦寺と號す
ふしはかせ○節博にて節は聲の上下博は聲の程をいふ
聲明○印土にては五明の第一とし支那にては梵唄といふ
法事讚○上下二卷あり
千本釋迦念佛○千本の釋迦堂にて二月九日より十五日まで行ふ涅槃會なり

文永○龜山天皇の年號なり
如輪上人○傳記不詳或説に法然上人の孫弟子澄空上人なりといへり
妙觀○實龜年中の佛工なり
五條の内裏○後醍醐天皇の時五條に内裏ありとも又後白河天皇の法住寺殿なりともいへり
藤大納言○其名知れず
園の別當入道○參議檢非違使別當藤原基氏弘安中薨

甚 立
そいたくた、せ。

(三百三十) 五條のだいりよとはけもの有りけり。藤大納言殿かた
られ侍し。殿上人ども。黒戸よて碁をうちけるよ。みすをか
へけて見るもの有り。たそと見むきたれを。きつね人のやう
突 居 差 観
よつゝいゝるてさしのごきたるを。あれきつねよ。とどよまれて。
感 近 未 練 化 損
まどひよけよけり。みれんの狐。さけそんトけるよこそ。

(三百三十一) 園の別當入道とさうなき庖丁者なり。ある人のもと
よて。いみどき鯉をいだいたりければ。みな人別當入道のと
うてうを見をや。と思へども。たやすくうちいでんもいかゞ。
猶 豫
とためらひけるを。別當入道さる人よて。此ほど百日の鯉を
きり侍るを今日かき侍るべきよあらざ。まけて申うけん

北山太政入道の西園寺公經前に出つ

てきられける。いみづくつぎく。興有りて人とも思へりける。とある人北山太政入道殿は語り申されたりければ。かやう此事。おのれはよよろさく覺ゆるなり。きりぬべき人なくは。たべ。きらんといひたらんは。猶よりあん。なんでも百日のこひをきらんぞ。との玉ひとを。をうしく覺えし。と人のうとり玉ひける。いとをか。大うとふるまひて興あるよりも。興がくてやまらかあるがまさりたる事なり。まれ人の響應なども。ついでをうしきやうよ取なとるも。誠よければ。たゞ其事となくて取出るいとよ。人々物をとらせるとも。ついでなくて是を奉らんといひとる。誠の志なり。をじむよとてはれんと思ひ。勝負のまけわざにとつ

けなどしたる。むつりと。

(三十三)すべて人は無智無能なるべきものなり。ある人の子れ見さまなどあしうらぬが。父の前よて人ともいふとて。史書此文を引たり。さかしく聞えしがども。尊者のまへよていさらざとも。と覺えしなり。又ある人のもとよて。琵琶法師の物語をきうんとて。びはを召よせたるに。ちうの一つおちたりか。作てつけよといふ。ある男れ中に。あいからぎとみゆるが。ふるさひさくれえ有りや。などいふを見れば。つめをおふしたり。びをなごひくよこそ。めくら法師のびを。其さたよも及ばぬ事なり。道よ心得たるよ。みや。とかたはらいたかりき。ひさくのえを。ひもの木とかやいひて。よか

其さたにも及ばぬ云々○座頭の琵琶などは樂人と同列に評定し難しとて古き杓の柄をつけよと差口し

たる男を蹴りたるな
り
ひもの木こかや云々
○槍物師の使ふ木に
て悪しきものなるに
この意なり

らぬ物。とぞある人仰られ。わかき人はすこし此事もよ
く見えわろくみゆるなり。

(三十三)萬のことがあらどと思はゞ。何事もまてありて。人を

わかぎ。うやく。若く詞すくなからん。はしかど。男女老少

みなさる人こそよけれども。それわかかたちよき人のこ

とるはしきは。忘れがたくおもひつかるゝものなり。よろ

づのことがはなれたるさま。上手めき。所えたるけしき。て。

人をないがしよまざるあり。

(三十四)人の物をとひたるよ。しらぎもあらど。有のまよ

いはんは。をこがましとよや。心まどはきやうよ。かへりぞ

たるよからぬ事なり。しをたる事も猶さだかよと思ひてや

うらゝかに云々○問
ふ人の耳に立たぬや
うに何さなく言ひ聞
かせたらんはさいふ
意なり

とふらん。又まてよしらぬ人も。などかなからん。うらゝかよ

ひさかせたらんは。おとなしく聞えなま。人はいまだ聞及

はぬ事を。わがしりたるまよ。さても其人の事の淺まき。

などはかりいひやりたれば。いかなるものあるよか。とお

かへしとひにやるこそ心づきまけれ。世よふりぬるをも。

おのづら聞もらまあたりもあれば。おほつりかからぬや

うよ。つげやりたらん。あかるべき事は。かやうの事は。物

かれぬ人の有るとなり。

(三十五)主ある家はまろある人。心のまよ入くる事を

とあるトなき所よは道行人みだりよ立入り。狐ふくろうや

うの物も人げよせかれねは。所えがほよ入まみ。おたまなど

いふけいからぬかたちも。あらそるゝ物なり。又かがみよは
 色形なきゆゑも。よろづのかけ来りてうつる。かゝみよ色か
 たちあらまじかば。うつらさらまじ。こくうよく物をいる。我
 らが心よねんくのは。いさまよよ来りうかぶも。心といふ
 もの、なきよやあらん。心よぬとあらまじかば。むねのうち
 よそこをくのは。入きたらさらまじ。

三三三 丹波は出雲といふ所有り。大社をうつしてめでたく
 作れり。志だの何がとかや。いる所なれば。秋の比聖海上人
 其外も人あまたさをひて。いざ玉へ。出雲をがみよかいもち
 いめさせん。とてぐもていきたるよ。各をがみてゆゝとく
 信おこしたり。御前なる獅子こま犬。そむきてうしろさまよ

出雲〇丹波國桑田郡
 にあり
 聖海上人〇傳記不詳

獅子こま犬〇獅子狛
 犬は神社に限らず禁
 中にもあり守護の意

なり

立たりければ。上人いみどくかんとて。あなめでたや。此志
 の立やう。いとめづらし。ふかきゆゑあらん。と泪ぐみて。いか
 殿はら。殊勝の事は御覽ととかめせや。無下なりといへむ。
 各あやみみて。まよ他よとなりけり。都のつとよかたらん。
 などいふよ。上人猶かかがりて。おとなしく物志りぬべき
 かほしたる神官をよびて。此御社の志の立られやう定て
 ならひ有るとよ侍らん。承らさや。といそれければ。其事よ候。
 さがなきわらはべどもの仕りける。奇恠よ候となり。とてさ
 らよりてまゑなほしていよければ。上人の感涙いたづら
 なりよけり。

三三七 やない箱よまゆる物は。たてさまよこさま。物よよるべ

やない箱〇柳枝を編
 て作る一尺四方のも
 のにて硯短冊又は鞠

冠など載するものなり

三條右大臣○兼好時代の三條家の人なるべけれど其名詳ならず
勘解由小路○世尊寺流にて能書の家なり

今一度云々○以下兼好の詞なりこの七條の自讃は凡て兼好の詞と心得べし

きよや。まさ物などは。たてさまよおきて。木のあはひより紙摺ひねりを通ほしてゆひつく。硯もたてさまよ置置たる。筆ころは摺ぎよ。と三條右大臣殿仰られき。勘解由小路かたてのこうじの家の能書の人々は。かりよもたてさまよおかるゝ事なり。かあらぎよ横こさまよもゑられ侍りき。

(三十三)御隨身近友が自讃とて。七ヶ條かきとゞめたる事あり。みか馬ば藝ぎ。させる事どもあり。そのため先例を思ひて。

自讃の事七あり。

一人あまたつれて花見ありき。に。最勝光院さいしょうこういんの邊へまで。を男これ馬こを走とらゝむるをみて。今一度馬うまを馳とする物ならば。馬うまたふれておつべし。志こころは一見玉へ。とて立たとまをたる

に。又馬うまを馳ばき。とゞむる所ところまで馬うまを引ひたふして。の騎る人泥でい土つちの中なかよ轉ろび入いる。其詞そのことばのあやまらざるを。人皆みなか感んぞ。

一當代いまだ坊ぼうよおはしましと比ひ。萬里小路まんのこうじ殿御所とのしよなり

堀川大納言殿ほりがわのののたまご祇候ぎこうを玉たまごひし。御さうごさうトへ用もち有りて参まゐりたりし。論語ろんごの四五六の卷まきをくりひろげ玉たまごひて。たゞ今御所ごしよまで紫むらさきの朱あけうはふてを悪おくむといふ文ぶんを御覽ごらんせられたき事こと有りて。御本ごほんを御覽ごらんせられども。御覽ごらんト出でされぬなり。猶なほよくひ引き見みよ。と仰おほびめて求もとるなり。と仰おほらるゝに。九くの卷まきのそ其處こゝのほどに侍まゐる。と申まをたをかは。あなうれ持。とてもて参まゐらせ玉たまごひき。う程ほどのそは見まども、つね常の事ことなれ

當代いまた坊に云々
○當代は後醍醐天皇かまた光明院なるべし坊は春宮坊とて皇太子の折をいふ
堀河大納言○後醍醐天皇の時ならば藤原師信なり師信は花山院の庶流にて當時東宮大夫なり
紫の朱うはふ云々○論語陽貨篇に惡紫之奪朱也とあり

秋の野云々○此は古今集なる在原棟梁の歌なり

款狀○官位を望み或は所願を申立る時の狀なり

常在光院○相國寺の末寺なり
在兼○左大辨菅原在兼唐橋家の祖なり
行房○左京大夫藤原行房世尊寺流なり

ど。昔の人はいさゝかの事をも。いみづく自讃一たるなり。後鳥羽院の御歌に。袖とたもと。一首のうちよありか。なんや。と定家卿お尋ね仰られたるに。秋の野の草れたもとか花を、さほよ出てまねく袖とみゆらん。と侍れば。何事かさふらふべき。と申されたる事も。時にあたりて本歌を覺悟せ。道の冥加なり。高運なりなどともくしくあるとおかれ侍るなり。九條相國伊通公の款狀よもこなる事なき題目をもかきのせて。自讃せられたり。

一常在光院のつき鐘の銘は。在兼卿の草なり。行房朝臣清書していかたにうつさせんとせしよ。奉行入道かの草を取出てとせ侍しよ。花の外よ夕をおくれは。聲百里よ聞ゆと

三塔○叡山の中東塔西塔横川の三塔をいふ
佐理行成○參議藤原佐理權大納言藤原行成共に一條天皇頃の能書にて小野道風と併せて三跡と稱す

いふ句有り。陽唐の韻とみゆるよ。百里あやまりかと申たりしを。よくぞみせ奉るける。おのれが高名なり。とて筆者のもとへいひやりたるよ。あやまり侍りけり。數行となはさるべし。と返事侍りき。數行もいかなるべきか。も一數歩の心かおほつかを。

一人あまたともかひて三塔順禮の事侍しよ。よがはの常行堂のうち。龍華院とかける古き額有り。佐理行成の間うたがひ有りて。いまだ決せせと申つたへたり。と堂僧とくしく申侍しを。行成からはうら書有るべし。佐理からはうらがき有るべからせ。といひたせしよ。うらはちりつもの虫の巢よていぶせけあるを。よくとまきのこひて。おのく見

八災○憂、苦、喜、樂、尋、伺、出息、入息、を八災といふ

賢助僧正○醍醐三宗院に住す
加持香水○後七日の御修法に行はる法式なり後七日とは正月八日より十五日まで行はる法事をいふ
僧都見はず云々○賢助僧正の同道したる僧都の見えざりしを兼好僧正の命を受け、て直に尋ね出て、連

侍しよ行成位署名年號さだかに見え侍しかば。人みな興よ入る。

一 那蘭陀寺（なんだじ）にて道眼聖談義（だうげんひじりだんぎ）せしに八災といふを忘れて。誰か覺え玉ふ。といひしを。所化（しよけ）みな覺えさせし。つほねの内より。是々（これこれ）よや。といひ出したれば。いみづくかんト侍りき。

一 賢助僧正（げんじよ）よ伴（ともぢ）ひて加持香水（かぢかうすい）を見侍しよ。いまだ（未）もてぬ程お僧正（そうじよ）かへりて侍りし。陣（じん）の外まで僧都見えせ。法師どもをかへしてもとめさせし。同（どう）しさなる大衆。おほくてえもとめあはせ。といひて。いと久（ひさ）く出て出たりしを。あなわびし。それもとめておはせよ。といはれし。かへり入

れ来しなり

てやがて（即）ぐしていでぬ。

一 二月十五日月あかき夜うち更（よ）て千本の寺（せんぽんじ）よまふで。うしろより入て。ひとりかほふかくかくして。聽聞（おやうもん）し侍りし。優（ゆう）なる女の姿（すがた）はひ人よりとなるが。わけ入て。ひざ（膝）も居（ゐ）れば。よはひなども。移（うつ）るばかりなれば。びんあ（便）と（惡）思（し）ひてまりのきたるよ。猶（なほ）るよりて同ト（どう）さまなれば。たち（立）ぬ。其後ある御所様のふるき女房のそゞろぞいされしついでよ。無下（むげ）よ色なき人よおはしけり。と見おと（下）奉るをなん有りし。情（なさけ）をしと恨み奉る人なんある。どの玉ひ出したるに。さら（更）にこそ心得侍らぬ。と申てやみぬ。此（こ）と後よ聞侍しは。かの聽聞（おやうもん）の夜御つほねの内より。人の御覽ト（み）ちりて。

侍 さらふ女房を作たて、出し玉ひて。便 善 詞
どかけんものぞ。その有さま参りて申せ。興あらん。とては
かり玉ひけるとぞ。

(三三十九)八月十五日。九月十三日は婁宿なり。此宿清明なるも
ゑよ。月をもてあそぶよ良夜とぞ。

(三四十)志のおのうらのあまれみるめも所せく。くらぶの山も
もる人志げからんよ。わりなくかよはん心の色こそ淺からず

あはれと思ふふーの忘がたき事も多からめ。おやはら
からゆるしてひたふるよ。むかへをゑたらん。いとまをゆか

りぬべー。世よ有りわぶる女のよげなき。老法師あやーれあ
づま人かりとも。よぎはしとまにづきて。さそふ水あらはな

婁宿〇二十八宿の一にて西方七宿の第二なり金狗の姓にて金氣水性に和して金水相生の節なれば清明なるなり
しのふの浦くらふの山〇名所を借りて忍び通ふことを飾り書きたるにてみるめは海藻の名なるを見る目に通はせたるなり

さらふ水あらは〇古今集に文屋康秀が三河椽になりて下る

て小野小町を誘ひし時小町の歌詠ひぬれば身をうき草の根を絶てて誘ふ人あらば往なんぞ思ふさありこの歌にてかけりわけしは山〇古今集に筑波山は山しげ山繁けれと思ひ入るにはさはらさりけりとありこの意にてかけり

あたら身をいたつらに云々〇他人の媒妁によりて卑く醜き男の妻に成りたる女はたとひ富裕に就くても可惜美しき其身を徒になすべき事かさて其心を思遣り卑下するなり

どいふを。中人いづかたも心よくきさまよいひなして。志られぬ。志らぬ人をむかへもてきたらん。あへなきよ。何事をか
打いづるこのまよせん。年月のつらさを分まらば山のな
ども。あひかたらはんこそつきせぬそのはあてもあらめ。そ
べてよその人のとりまかひたらん。うたて心づきなまき事
多かるべし。よき女ならんよつけても。品くだりみおく、年
もたけなん男も。かくあやらしき身のためにあたら身をいた
づらになさんやは。と人も心おとりせられ。我身はむかひる
たらんも影はづしく覚えかん。いとこそあへかからめ。梅の
花かうはらしき夜のおぼろ月また、ぎと。みかさかはらの露
わけ出ん有明の空も。我身さまよ志のさるべくもかからん

人は。たゞ色唯好このまさらん不如はしか不。

(三言十二)望月望月のまどかある事は。あたらしくも住住せせ。やがてか欠

けぬ。心とぐめぬ人は。一夜の中重よさまでかはるさまも見え

ぬ重。やあらん。病のおもるも。住重るひまかくして。死期重をで

よ近重し。されどもまだ病急重あら重ぎ。死重よ趣重かざるほとは。常住重

平生重の念重あならひて。生の中重よ多くの事を重あして。後重ま重づか

よ道重を修重せんと思重ふほどよ。病をうけて死門重よ望重む時。所願重

一事重も成重せ重ぎ。いふかひかくて。年月の懈怠重を悔重て。此度重も重

立重あほりて。命全重せば。夜を日重につぎて此事重彼事重おこたら重ぎ。

なしてん。とねがひをおこすらめど。やがておもりぬれば。我重

おもあら重ぎ。取重みだして重て重てぬ。此たぐひのみこそあらめ。此重

此たぐひのみ云々〇人間の後世に懈怠する人は大方此類は

りならんとなり

事まづ人々いそぎ心得置おくべし。所願置を成置して後置いとま有

りて。道置よ向置はんとせば。所願置つくべから置ぎ。如幻置の生れ中に。

何事置をかあさん。そべて所願置皆妄想置あり。所願置心置よ來置らむ。妄置

心迷亂置をとりて。一事置をもあまべから置ぎ。直置よ萬事置を放置下置

して。道置よ向置ふ時。さ置はりなく所作置あ置く置て。心身置あ置かく置ま置づか

あり。

(三言十二)とことあへ長違順長よつかはる使事は。ひとへ偏苦樂偏

れためあり。樂求といふこの愛求をる事なり。おれをよむ求

る止とやむ時なく。樂欲求をる所。一求よは名求なり。名求よ二種求有り。行求

跡求と才藝求とのほまれなり。二求よは色欲求。三求よは味求あり。よろ万づ

のねがひ。此願二願よはあ願り願ぎ。是願倒願の相願よりお願こりて。そ若こ干

違順〇違は我心に違ふことにて苦なり順は我心に順ふことにて樂なり苦を避け樂に就かん爲に違順に使はるゝなり

くのわづらひ有り。もとめさらんには志りト。

(三十三) 八にちをいふ。父はく。佛はいかなる物なり候らん。といふ。ちがいはく。佛は人のなりたるなり。と

又とふ。人は何として佛はなま候やらん。と父また。佛のを

とへふよりてなるなり。とまたふ。又とふ。をへ候ける佛を

を。何がをへ候ける。と又こたふ。それもまたさきの佛のを

とへふよきて成り玉ふあり。と又とふ。そのをへはトめ候

ける。第一の佛はいかある佛か候ける。といふ時。父空より

やふをけん。土よりやわさけん。といひてわらふ。問ひつめら

れてえあたへざかり侍りつ。と諸人よかたりて興トき。

校訂 徒然草下巻終

明治廿三年二月廿五日印刷
明治廿三年二月廿六日出版

正價金二十五錢

校訂者 東京府南葛飾郡寺島村廿三番地 増田 于信

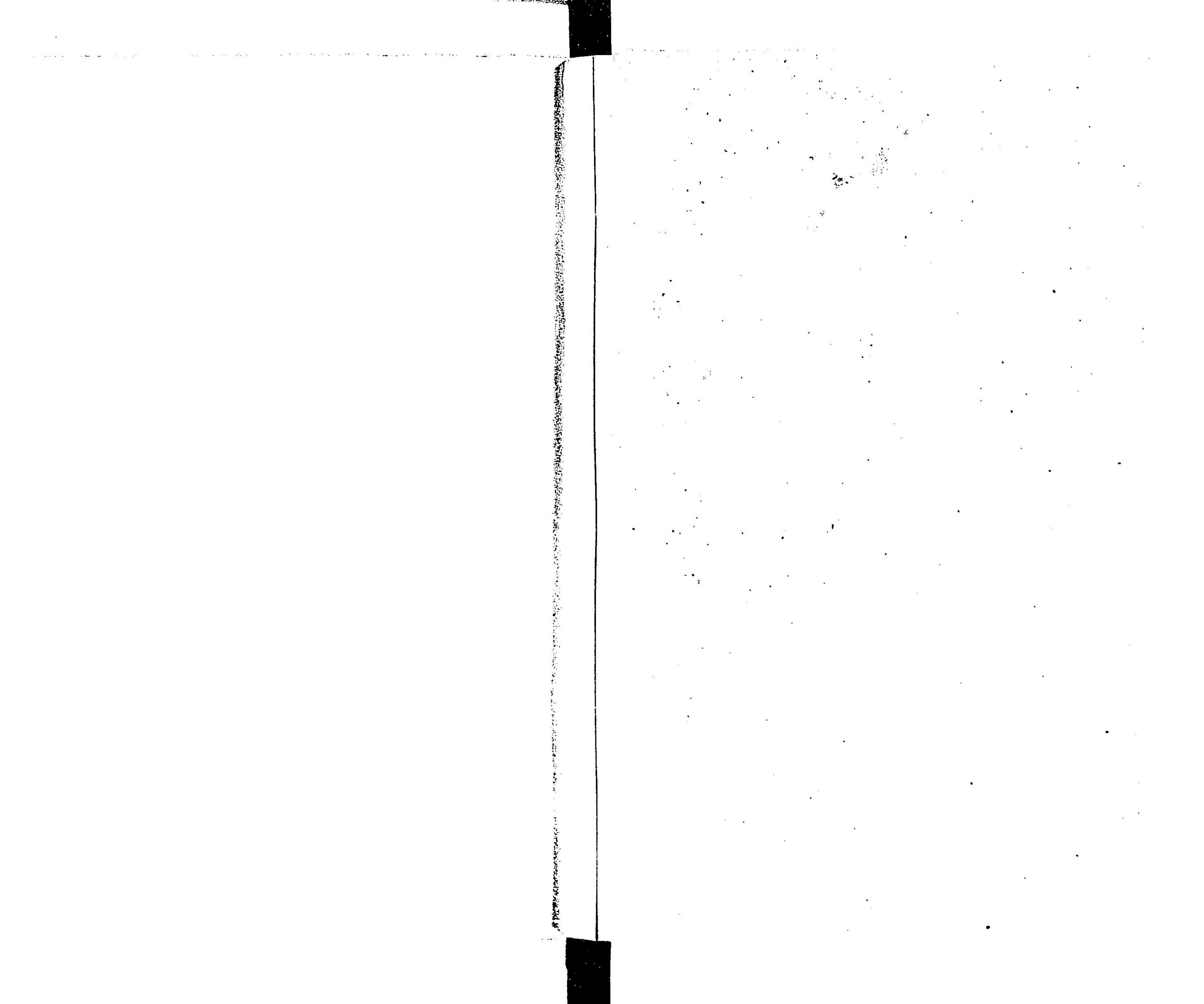
發行者 東京市神田區西福田町一番地 伊藤岩 治郎

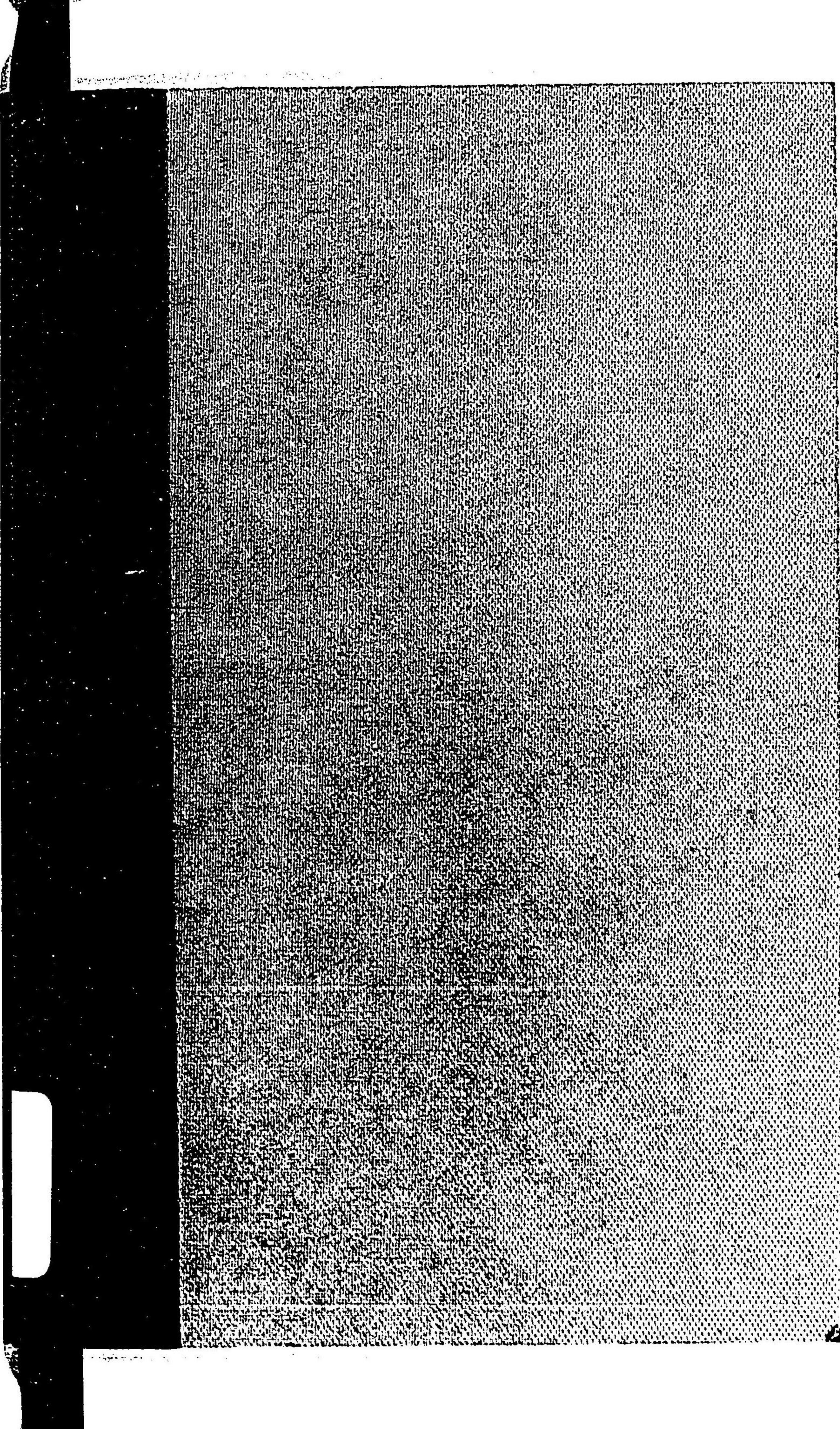
發兌 大阪市東區心齋橋北久太郎町 柳原 喜兵衛

書肆 京都市上京區二條通柳馬場東 若林 茂一郎

印刷者 東京市京橋區元數寄屋町四丁目二番地 藏田 仙助之







特 22

187

校訂
標註 徒然草

国立国会図書館

095816-000-4

特 22-187

校訂標註徒然草

増田 于信/校

M 2 3

DBR-0023

